

ヨハネ 1 : 43～51 「来て、見なさい」

私がイエス様の十字架は自分の罪のためでしたと信じて洗礼を受ける決心をしたときのことや自分のこれからの歩みを主のために献げますと献身を決心したときのことを振り返ると、みことばによって神様が語りかけ、迫ってきて、それに応答したのですが、その応答は不思議に導かれ、押し出されるようだったと思います。神が働きかけてくださったのでした。そのような神の働きかけは主イエスの弟子たちにもあったと思います。

1. ピリポに対する招き (: 43～44)

イエスはバプテスマのヨハネのもとに来ていて、この数日を過ごしていましたが、ガリラヤに行こうとされました。イエスはピリポを見つけて、「わたしに従って来なさい」と言って、彼を招きました。誰かが彼をイエスのもとに連れて行ったとか、イエスと彼の間に入って紹介したということではなかったようです。イエスのほうからピリポに働きかけました。そして、イエスに招かれて、ピリポはすぐに従ったようです。

人がイエス・キリストを知るようになったり、教会に行くようになったりする導かれ方はそれぞれ違っても、人がイエス・キリストと出会うには、そこに神の働きかけがあります。人が信仰を持つことができるのは、主イエスがその人に御声をかけてくださるからです。聖霊の働きがなければ、誰もイエス・キリストを信じることはできません。主イエスが「わたしに従って来なさい」と招いてくださるので、それに応えて従っていくことができるのです。

このことに神の選びと恵みが表されています。私たちもそれぞれの導かれ方で主イエスと出会うことができました。主がみことばを語ってくださり、みことばと共に聖霊が働かれ、私たちはイエス・キリストを信じ、従う決心をすることができました。そのように神の選びと恵みによって私たちはそれぞれ導かれていくのです。

2. ピリポの証言 (: 45～46)

さて、ピリポはイエスに招かれ、短い交わりの中ですぐに確信したようです。彼は友人のナタナエルを見つけて、自分が確信したことを伝えます。

45 節。律法にも預言書にも書かれている方といえば、彼らユダヤ人の待望するメシア、救い主です。確かに旧約聖書には多くの箇所、様々な事柄によって、やがて来られるメシアに関することが示されています。

ですから、私たちは旧約聖書の様々な箇所にキリストが予表され、預言されていることを意識して、読む必要があります。私たちの霊的な目が開かれて、キリストについて悟ることができるように主に祈りつつ、旧約聖書を読みたいと思います。

ピリポはイエスこそメシアに違いないと確信を与えられました。そして、そのことをナタナエルに伝えました。きっと喜んでもらえると思ったでしょうけれども、彼の反応は意外に冷ややかでした。

ピリポが「ナザレの人で、ヨセフの子イエスです」と紹介したことを聞いて、ナタナエルは「ナザレから何か良いものが出るだろうか」と言いました。ガリラヤ地方については、ユダヤの中心地であるエルサレムからは、北に遠く離れた場所で、異邦人の地と接していることもあって、ユダヤ人の中でも蔑まれていたことが分かります。そんなガリラヤのナザレからメシアが出るはずがないとナタナエルは考えました。多くの人がそのように考えたでしょうけれども、それは偏見でした。

そのようなナタナエルの反応に対して、ピリポは「来て、見なさい」と勧めました。このことばほど賢明な助言はないでしょう。偏見が取り去られるためには、自分で確かめることが一番です。また、自分で確かめるようにと招くことで、ピリポは自分が知ることができた真理に絶対の自信を持っていることを示しました。ナタナエルがイエス・キリストを知ることができたのは、「来て、見なさい」という率直な招きのことばがあったからでした。

イエス・キリストを信じている私たちも、まだイエス・キリストを知らない方に対して大胆に勧めて良いのです。イエス・キリストのもとに「来て、見なさい」、聖書を通してイエス・キリストを知ってください、とお勧めしたいと思います。キリスト教には、隠さなければならぬことなど一つもありません。「私は救い主に会いました。来て、見てください」と、家族や友人に語りしたいと思います。

3. ナタナエルの驚き (: 47～51)

47 節。主イエスが言われた「まさにイスラエル人です。この人には偽りがありません」とはどのような意味で

しょうか。偽りが無いということですから、心に悪意や貪欲がなく、正直で善意の人なのでしょう。そして、真実のイスラエル人だと言っていますから、イスラエルの神、主を信じて、ふさわしく歩んでいたのでしょう。神が約束されたメシアを真剣に待ち望んでいたのでしょう。

ナタナエルが真剣にメシアを待ち望んでいたからこそ、ピリポはそんな彼を見つけて「モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました」と言ったのでしょう。そして、ナタナエルは約束されたメシアに真実に期待していたので、ナザレの人と聞いて、「ナザレから何か良いものが出るだろうか」という応答になったのだと思います。彼の霊的な理解力や洞察力は限られていましたが、与えられている旧約聖書の知識に従って、注意深く捉えようとしていたのでしょう。

ナタナエルのそのような点を主イエスはご存知で、称賛されたのです。その点に私たちが倣いたいと思います。私たちの霊的な理解力は限られています。しかし、主はみことばによって私たちにお語りくださり、私たちが真理を理解できるように聖霊が助けてくださいます。真理を求め、真理に従って生きることができるよう祈りたいと思います。

ナタナエルは驚いて、「どうして私をご存知なのですか」と問います。初対面で、まだ話もしていないのに、どうして自分のことを分かっていると言えるのかと、いぶかしむ思いもあったかもしれません。

それに対して、イエスはさらに驚くようなことを言います。「ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいるのを見ました」。

木の下にいるというのは単に場所のことだけではないようです。木の下で神について黙想したり、祈ったりすることがよくあったということです。ナタナエルはいちじくの木の下で旧約聖書のある箇所を思い巡らし、神に祈っていたのではないのでしょうか。周りには人はおらず、一人で静まっていたと思います。その自分の様子を見て、知っていたと言われるのですから、この方は普通の人ではないとナタナエルは思い知らされました。

49 節。ユダヤ人たちは旧約聖書から、神が遣わされるメシアは神の子であると教えられていました。また、ダビデの子孫でイスラエルの王になる方と信じていました。ナタナエルの告白は、ユダヤ人の一般的な考えに基づいていました。しかし、イエスこそがそのメシアであると信じる点で、そこから一歩踏み出していました。その一歩は大きいのです。

「神の子」も「イスラエルの王」もイエス・キリストについて正しい告白ではありますが、真理のすべてではありません。そこで、主イエスはご自身がメシア、キリストであるとはどのようなことであるのかについてお語りになり、教えます。

50 節。キリストは私たちの生活も心の内も知っておられ、私たちの霊的状态を見ておられます。しかし、「それよりも大きなことを、あなたは見ることになります」と主は言われます。どのようなことでしょうか。

51 節。「天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを」見るという事柄は、創世記に記されているヤコブの経験したことを思い起こさせます。夢の中で、はしがが地に立てられ、その上の端は天に届き、神の御使いたちがそのはしごを上り下りしていました。主イエスはご自身がそのはしごのように天と地の間に立つと言われます。イエスにおいて、天の栄光が地に下りて来て、人となられた神の御子において神の栄光や真理が明らかにされました。また、イエスによって、地に囚われていた人々が天へと引き上げられるのです。

そのように、人はイエス・キリストにより神を知ることができ、神に近づくことができます。神と人との交わりを可能にするのがイエス・キリストなのです。

主イエスは一人ひとりを「わたしに従って来なさい」と招いてくださいます。メッセージを聞く中で、みことばを学ぶ中で、祈りの中で、神が招いているという思いが迫ってきたら、素直に応答していただきたいのです。主イエスに従っていきますと決心していただきたいのです。

イエス・キリストをまだ信じていない方たちには、何らかの偏見があるのかもしれませんが、それが取り去られるには、自分で確かめることが必要です。イエス・キリストを信じている私たちは、「私は救い主に会いました。イエス・キリストのもとに来て、見てください」と周りの方々に勧めましょう。

そして、神と私たちの間に立つてくださったイエス・キリストのことを知るができるように、自分のこととして知っていくことができるように、祈り求めましょう。「天が開けて…あなたがたは見るようになります」と主は言われます。神が働きかけ、声をかけ、教えてくださいます。